

# 東海地域縄文時代後晩期の ベンケイガイ製貝輪

● 川添和暁

東海地域、縄文時代後晩期のベンケイガイ製貝輪について、「加工の状態および程度」・「計測」・「形態」の諸属性について総合的な分析を行った。その結果、「腕輪」としての主たる機能・用途のみでは説明しきれない事象をいくつか提示し、その意義付けを若干行うことができた。II期前半(後期中葉～後葉)・II期後半(晩期初頭～前葉)・III期(晩期中葉～晩期末)と時期が変遷するにしたがい、加工・法量・形態に幅が見られるようになった一方で、ある特定の志向に基づく貝輪製作も垣間見られた。

## 1 はじめに

東海地域では、縄文時代・弥生時代を通じて、貝輪の出土が知られている。貝種・出土数・出土状況・各貝種における加工の状態および程度などを検討すると、これらは決して一様ではない。「前稿」(註1)では以上のことを探り、I期(縄文早期後半～縄文後期前葉)・II期(縄文後期中葉～縄文晩期前葉)・III期(縄文晩期中葉～縄文晩期末)・IV期(弥生前期～弥生中期後葉?)と段階設定を行い、特にII期・III期において、加工の状態・程度に「差」が顕著であることを指摘した。

以上のことを見て、本稿は特に縄文時代後晩期(II期・III期)のベンケイガイ製貝輪について詳細に検討するものである。分析対象地域は、東海地域(愛知・岐阜・三重・静岡の遠江地域)を中心とする。ベンケイガイ製貝輪を取上げる理由は、東海地域において当該時期に資料数が多くなり各貝輪群構成の主体となっている場合が多いこと、かつ他貝種の貝輪に比べ加工の状態・程度に差がより顕著に見られることなどである。ベンケイガイ製貝輪に関する「製作+使用遺跡」「使用遺跡」の様相を整理し、各遺跡の貝輪群について腕輪としての機能・用途とは別の、製作上の志向について中心に考察していく。

ここで述べる「貝輪」とは、貝殻の中央に大

きめの孔を開け、環状あるいは半環状に加工する(もしくは加工しようとする)意図の見られるもの、と定義をする。加工・形状を第一義とするため、必ずしも用途としての「腕輪」とは同義ではない。また、ここで「ベンケイガイ製貝輪」と称している貝輪素材には「ベンケイガイ」と「タマキガイ」の両者を含んでいることを断つておく。

なお、貝輪に関する研究小史については前稿に若干まとめたので、これを参考願いたい。また、貝輪の部位名称などは図1に提示する。

## ベンケイガイ製貝輪の出土状況

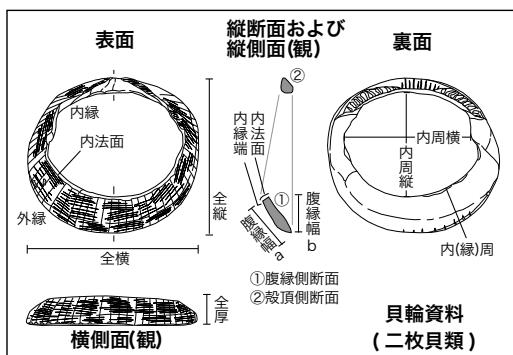
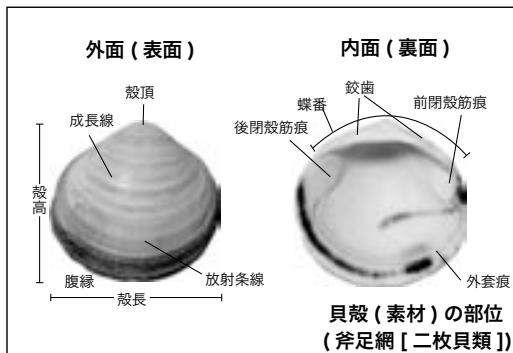
出土遺跡 図2・表1は縄文時代後期以降、弥生時代までの貝輪出土遺跡を示している。このうち、縄文時代後期前葉までのI期に属する資料は咲畠貝塚例のみで、かつIV期に属するのは朝日遺跡・瓜郷遺跡・白浜遺跡のみである。その他はII・III期のいずれかに属する。

II期は縄文後期末までの前半と縄文晩期初頭からの後半に分けられる。II期前半は、衣浦湾周辺では築地貝塚、矢作川下流域では八王子貝塚、三河湾入口の神明社貝塚、吉胡貝塚・伊川津貝塚・川地貝塚などの渥美半島、蜆塚貝塚・西貝塚などの遠江地域に見られ、内陸部では根方第二岩陰でも出土している。神明社・吉胡・伊川津・保美の各貝塚は後期後葉以降から晩期にかけての営みが中心であり、II期後半に所属

する資料がより多いと考えられる。II期後半も雷貝塚などの名古屋台地、石浜貝塚・寺屋敷東貝塚・本刈谷貝塚などの衣浦湾周辺、三河湾入口の神明社貝塚、吉胡貝塚・伊川津貝塚・保美貝塚の渥美半島、などが中心となる。なお、内陸部では樅原遺跡でも出土している。III期では揖斐川下流域の羽沢貝塚、名古屋台地の古沢町遺跡、矢作川下流域の新御堂貝塚、吉胡貝塚・伊川津貝塚・保美貝塚・川地貝塚の渥美半島、三河湾入口の神明社貝塚などがあるが、さらに三河湾奥部の平井稻荷山貝塚・五貫森貝塚・水神第二貝塚・大西貝塚、伊勢湾入口の大築海貝塚、英虞湾先端の阿津里貝塚でも資料が存在するようになることが大きな特徴である（註2）。

### 遺跡内の出土数および点数比

「前稿」で指摘したように、II期は「出土遺跡数の増加」と「一遺跡からの出土点数の増加」と「貝種の増加」の三つの意味で出土点数が増加する時期である。またIII期はベンケイガイ製が他貝種に比べ圧倒的多数になっていく時期である。このことを以下さらに詳細に検討して



いく。なお、各遺跡の貝輪群の中でII期・III期にわたって存在しているものが多く、厳密に区分することができない場合もある（註3）。

はじめに、出土点数について概観する。現在、管見の及ぶ範囲で、東海地域において一遺跡から最も多く出土している遺跡は、伊川津貝塚の330点である。しかし、その中で1992年調査地点はIII期に所属すると考えられ、その他はII期を中心に一部III期に及ぶものがあると考えられることから、142点はIII期に、それ以外の188点はII期中心とすることができる。その他一遺跡で100点以上になると思われる遺跡には吉胡貝塚がある。

貝輪群内の点数比では、ベンケイガイを中心になると、(1)ベンケイガイ製のみの貝輪群、(2)ベンケイガイ製が(圧倒的)多数を占める貝輪群、(3)ベンケイガイ製以外の貝種が多数を占める貝輪群、(4)ベンケイガイ製以外の貝種のみの貝輪群、に分類できる。(4)は各時期に散発的に存在しているのみである。(3)はII期の、特にII期後半に顕著になる傾向がある。本刈谷貝塚・枯木宮貝塚ではフネガイ科（註4）が最も多く、伊川津貝塚84年調査ではイタボガキ

### 加工の状態・程度による分類

#### 敲打

部分 有無・程度	内縫(内法面)		外縫	
	初回のみ	a1	無	b0
有 複数回	an		bn	
無	a0		b0	

#### 研磨

部分 有無	表面	内法面	内縫端	外縫	裏面
	c	d	e	f	g
有	cn	dn	en	fn	gn
無	c0	d0	e0	f0	g0

例 表面からの敲打による1回目の穿孔で  
終了しているものを  
加工(a1・b0・c0・d0・e0・f0・g0)と示す

### 計測による分類

計測1 … 全縫 × 全横

計測2 … 内周縫 × 内周横、あるいは内縫周

計測3 … 腹縫幅、または全縫に対する腹縫幅比

図1 貝輪の部位説明・計測部位、および資料分類方法

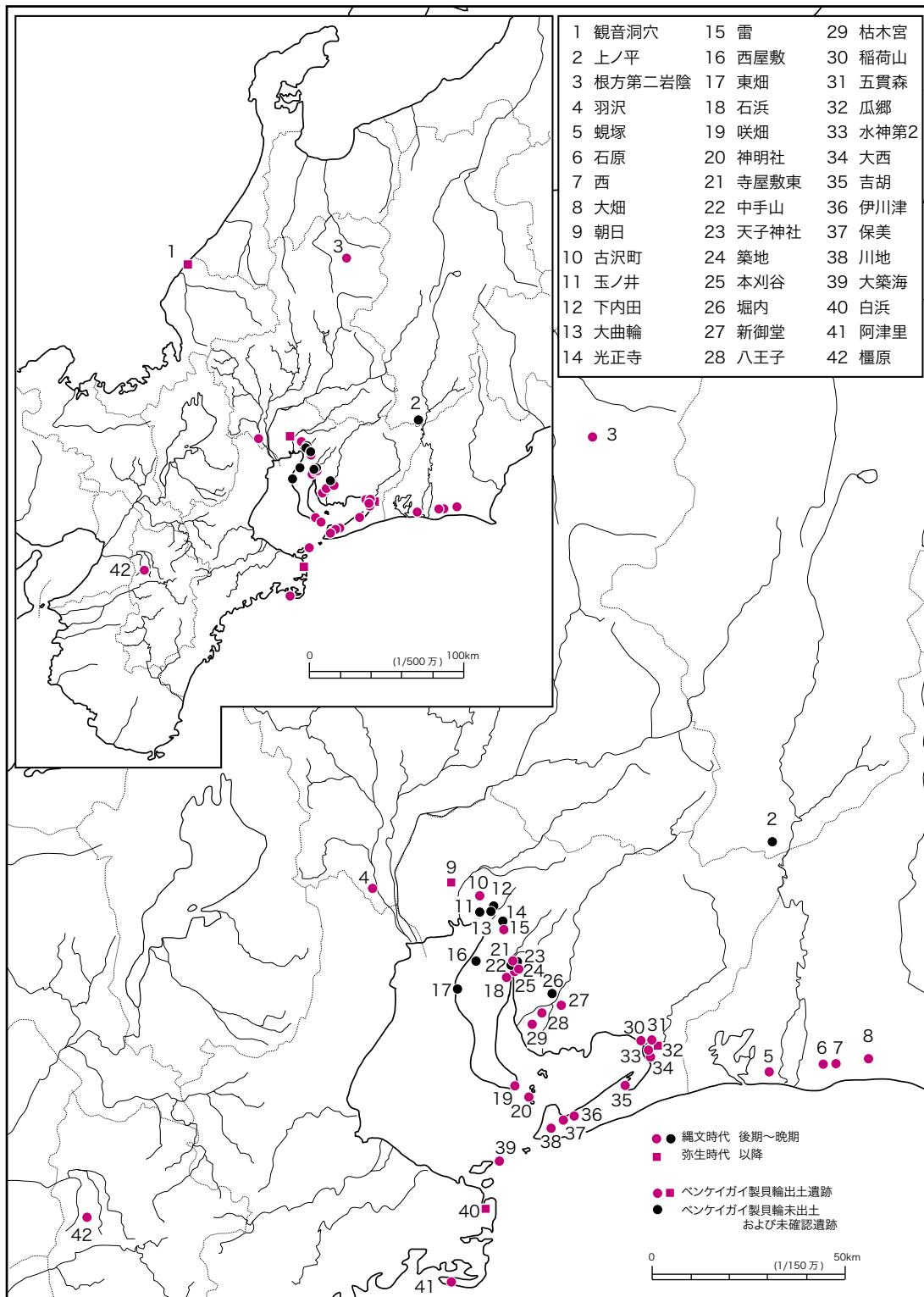


図2 縄文時代後晩期および弥生時代貝輪出土遺跡

科が計 89 点と最も多くなっている。(1)・(2)は II 期・III 期を通じて見られるものの、特に III 期に属する平井稻荷山貝塚・五貫森貝塚・大西貝塚・大築海貝塚・阿津里貝塚でこの傾向が強く現れている。II 期で(1)・(2)を示す遺跡では貝輪出土資料数自体が少ない傾向にある。

## 資料の検討

総合的な貝輪の検討・考察を行う上で、一側面に立脚した分類で表出するのは困難を伴う。「貝種」以外の手続きとしては「加工の状態・程度」・「計測」・「形状」の 3 項目に分けての検討が必要と考える。ここでは前稿では提示しなかった内容を含めて、項目別に「加工の状態・

程度」・「計測」・「形状」の各内容により、遺跡ごとの貝輪群の様相を整理する(図 1)。

なお、検討の前提として、資料の出土状況について言及する。多くの資料は、貝層および遺物包含層から個別に出土している。また、完形を保っている資料も少なく、多くは破片・細片の状態で出土する場合が多い。その中でも、人骨着装および付近から出土している例も若干数知られており、「腕輪」としての貝輪の法量的分析を行う際に、先学においても基礎資料に位置づけられている。東海地域でもベンケイガイ製貝輪についてこのような事例は根方第二岩陰(1~5)(註 5)・稻荷山貝塚(39)・吉胡貝塚・伊川津貝塚(61・62)・保美貝塚で知られている。

番号	遺跡名	所在地	詳細時期	時期の段階設定				ヘケガイ科	フネガイ科	イタボガキ科	イタボガキ科	イタボガキ科	チャヨセシノマグロ	アカニシ	オオシタノハ	イカガイ科	その他(不明)	備考	文献
				I 期	II 期	III 期	IV 期												
3	根方第二岩陰	岐阜県大野郡丹生川村	縄文後期	?				6											藤本・野村・渡辺1995
4	羽沢貝塚	岐阜県海津郡南濃町	縄文後期~晩期	●	●			1											小川1933
5	蜆塚貝塚	静岡県浜松市	縄文後期後葉	●	●			1											渡辺彌2000
			縄文後期~晩期初	●	●			2	1										後藤ほか1957
			縄文後期~晩期初	●	●			1											後藤ほか1958
			縄文後期~晩期初	●	●			14	6	1					1	3	その他 2 点 はハマグリ製		後藤ほか1960
6	石原貝塚	静岡県磐田市	堤之内式中心	?	?			5	3										市原1967
7	西貝塚	静岡県磐田市	堤之内式~宮瀬式主体(権王式)	●	○			4							1				麻生1961
8	大畠貝塚	静岡県袋井市	縄文前期前葉以降	●	●			5	2										清野1969
9	朝日遺跡	愛知県西春日井郡清洲町	弥生前期	●	●			1											市原編1981
10	古沢町遺跡	名古屋市中区	縄文晚期末~弥生前期	●	●	1	1												伊藤ほか1972
11	玉ノ井遺跡	名古屋市南区	縄文晚期前葉~中葉	●	○			1											愛知県教育委員会1982
12	下内田貝塚	名古屋市瑞穂区	縄文後期	●	●														宮原編1992
13	大曲輪貝塚	名古屋市瑞穂区	縄文晚期	●	○														續編2003
14	大正寺貝塚	名古屋市緑区	縄文中期または晩期	?															吉田・和田1971
15	雷貝塚	名古屋市緑区	縄文晚期	●	○	1													伊藤・川合1993
16	西船貝塚	愛知県知多市	縄文晚期	●	○														森(刊行年不詳)
17	東船貝塚	愛知県知多郡東浦町	縄文晚期	●	○														伊藤・川合1993
18	石浜貝塚	愛知県知多郡東浦町	縄文後期末~晩期	●	○	2													鶴岡・楠2003
19	伏見貝塚	愛知県知多郡南知多町	縄文後期初頭~前葉	●	●	1		1											穂部・丹閑・杉崎・久永1960
20	仲明社貝塚	愛知県知多郡南知多町	縄文後期後葉~	●	●	42	7	1		2	2								山下編1989
21	寺屋敷東貝塚	愛知県名古屋市	縄文後期~晩期	●	○	1	1												表採資料
22	弓手山貝塚	愛知県名古屋市	縄文晚期	?	?			1											大參・加藤・山田・川合1989
23	弓子神社貝塚	愛知県名古屋市	縄文後期~晩期	●	●	1													大參・加藤・山田・川合1989
24	糸地貝塚	愛知県名古屋市	縄文後期中葉中心	●	●	2													大參・杉浦1998
25	木川谷貝塚	愛知県刈谷市	縄文晚期	●	○	5	17			4?									大參・加藤・山田・川合1989
26	内貝塚	愛知県安城市	縄文晚期中葉・弥生前期	●	●	1													新藤2004
27	新御堂貝塚	愛知県豊尾市	縄文後期~晩期	●	●	3													鈴木1995
28	八王子貝塚	愛知県西尾市	縄文後期	●	●	8	3	1		1	1								松山2003
29	佐木宮貝塚	愛知県西尾市	縄文後期後葉~晩期中葉	●	○	17	22	1	13										牧ほか1983
30	平井稻荷山貝塚	愛知県犬山市小坂町	縄文晚期中葉・弥生前期	●	●	12	1			1									杉原・外山1964
31	五貫森貝塚	愛知県豊橋市	縄文晚期中葉・弥生前期	●	●	13	1				1								中村・出口1992
32	瓜須遺跡	愛知県豊橋市	弥生中期	●	●	3													清野1969
33	水神(第二)貝塚	愛知県豊橋市	縄文晚期後葉~弥生前期前半	●	●	9	3	2						5	イモガイ製 権王式?			松原・外山1964	
34	大西貝塚	愛知県豊橋市	縄文晚期後葉	●	●	20	1	1		1									中村・出口1992
35	吉胡貝塚	愛知県瀬美郡田原町	縄文後期~晩期	●	●	51	14	4	13		3	1							清野1969
36	伊川津貝塚	愛知県瀬美郡瀬美町	縄文後期~晩期前葉	●	●	41	16	2	3		6	2							文化財保護委員会1952
37	保美貝塚	愛知県瀬美郡瀬美町	縄文後期~晩期前葉	?	?	1	2												増山2003
38	川地貝塚	愛知県瀬美郡瀬美町	縄文後期中葉中心	●	●	49	14	1											久永ほか1972
39	大葉海貝塚	三重県鳥羽市	縄文晚期	●	●	39	39	24	65		3	7	2						小野田・春成・西本1988
40	白浜遺跡	三重県鳥羽市	弥生中期後葉以降	●	●	7					10	1							小野田・芳賀・安井1995
41	阿津里貝塚	三重県志摩市志摩町	縄文後期以降?	●	●	7													大川1923
				?	?	2												小林・高平・長谷部・早川1966	
				?	?	1	2											小野田1991	
				?	?	1	1											清野1969	
				●	○	9	1	2		1								小野田・安井ほか1993	
				●	○	1												鈴木1995	
				●	○	2												立教大学博物館学講座1966	
				●	○	7												鈴木ほか1990	
				●	●	1												鈴木1951、三重県教委1954	

※遺跡番号は図 2 と一致。地名は「平成の大合併」以前のものである。

表 1 縄文時代後晩期および弥生時代貝輪出土点数

## 1 加工の状態・程度による分類

貝輪の「製品」「未製品」の概念は、我々の感覚では判断が難しいところが多く、一旦この区別は用いない。貝輪製作の方法は大きく「敲打」と「研磨」とに分けられる。ここでは貝輪の各部位に対する加工の状態・程度を分類し、各遺跡での貝輪群内での様相を整理していく。その表現方法として図1で示したような記号を用いる(註6)。「前稿」でも指摘したように、II期・III期では、同一遺跡内の貝輪群で資料間に差が顕著にみられるのみならず、遺跡間(貝輪群の総体)同士でもその差が見られるようになる時期である。ここでは、その点についてさらに詳細に検討する。

まず、分類項目を提示する。中央に穿孔を一度行った状態のもの【(a1・b0) (c0・d0・e0・f0・g0)】、および複数回の敲打により内縁を広げているもの【(an・b0) (c0・d0・e0・f0・g0) および (an・bn) (c0・d0・e0・f0・g0)】は、蜆塚貝塚・西貝塚・神明社貝塚・枯木宮貝塚・平井稻荷山貝塚・五貫森貝塚・水神第二貝塚・大西貝塚・吉胡貝塚・伊川津貝塚・川地貝塚・大築海貝塚・阿津里貝塚などで見られるものの、その他の遺跡ではこの状態の貝輪は見られない。また、上記遺跡の中でも、蜆塚

貝塚・西貝塚・枯木宮貝塚では【(a1・b0) (c0・d0・e0・f0・g0)】が見られないことで、他の遺跡とは様相が異なる。また、未加工のベンケイガイ貝殻(素材貝)も神明社貝塚・川地貝塚・大築海貝塚・阿津里貝塚でわずかながら存在する。一方、敲打と研磨を両方行っている資料は、上記の遺跡を含めて、広く見られる。

以上から、ベンケイガイ製貝輪群を、以下のような三群に分けることができる。

ベンケイガイ製貝輪群(1) (a1 · b0) (c0 · d0 · e0 · f0 · g0)、(an · b0) (c0 · d0 · e0 ·

$f_0 \cdot g_0$ 、 $(a_n \cdot b_n)$   $(c_0 \cdot d_0 \cdot e_0 \cdot f_0 \cdot g_0)$  および「敲打+研磨」の各種別が存在する貝輪群

ベンケイガイ製貝輪群(II) (an · b0) (c0 · d0 · e0 · f0 · g0)、(an · bn) (c0 · d0 · e0 · f0 · g0) および「敲打+研磨」の各種別が存在する貝輪群

### ベンケイガイ製貝輪群(III) 「敲打+研磨」の各種別のみが存在する貝輪群

貝輪群(III)を示す遺跡は、加工の状態・程度が平均化されていることなどから、その貝輪の「使用遺跡」と想定することができよう。一方、貝輪群(I)を示す遺跡は、加工の状態・程度の格差が認められ、製作が行われている遺跡と考えられる(註7)。しかし、吉胡貝塚・伊川津貝塚のように埋葬人骨に装着あるいは接した状

表2 ベンケイガイ製貝輪遺跡別加工分類表

態で出土しており、使用も行われている。したがって製作のみならず、「製作+使用遺跡」と位置づけることができる。貝輪群(II)は、【(a1・b0) (c0・d0・e0・f0・g0)】が見られない以外は貝輪群(I)に近い様相を呈する。「製作+使用遺跡」と考えられるが、その製作がより加工の加わった状態から始まっている可能性がある。

上記のことを整理すると、大きくは貝輪群(I) (II) の「製作+使用遺跡」と貝輪群(III)の「使用遺跡」に分けられる。以下、時期別に貝輪群の様相をさらに検討していく(表2)。

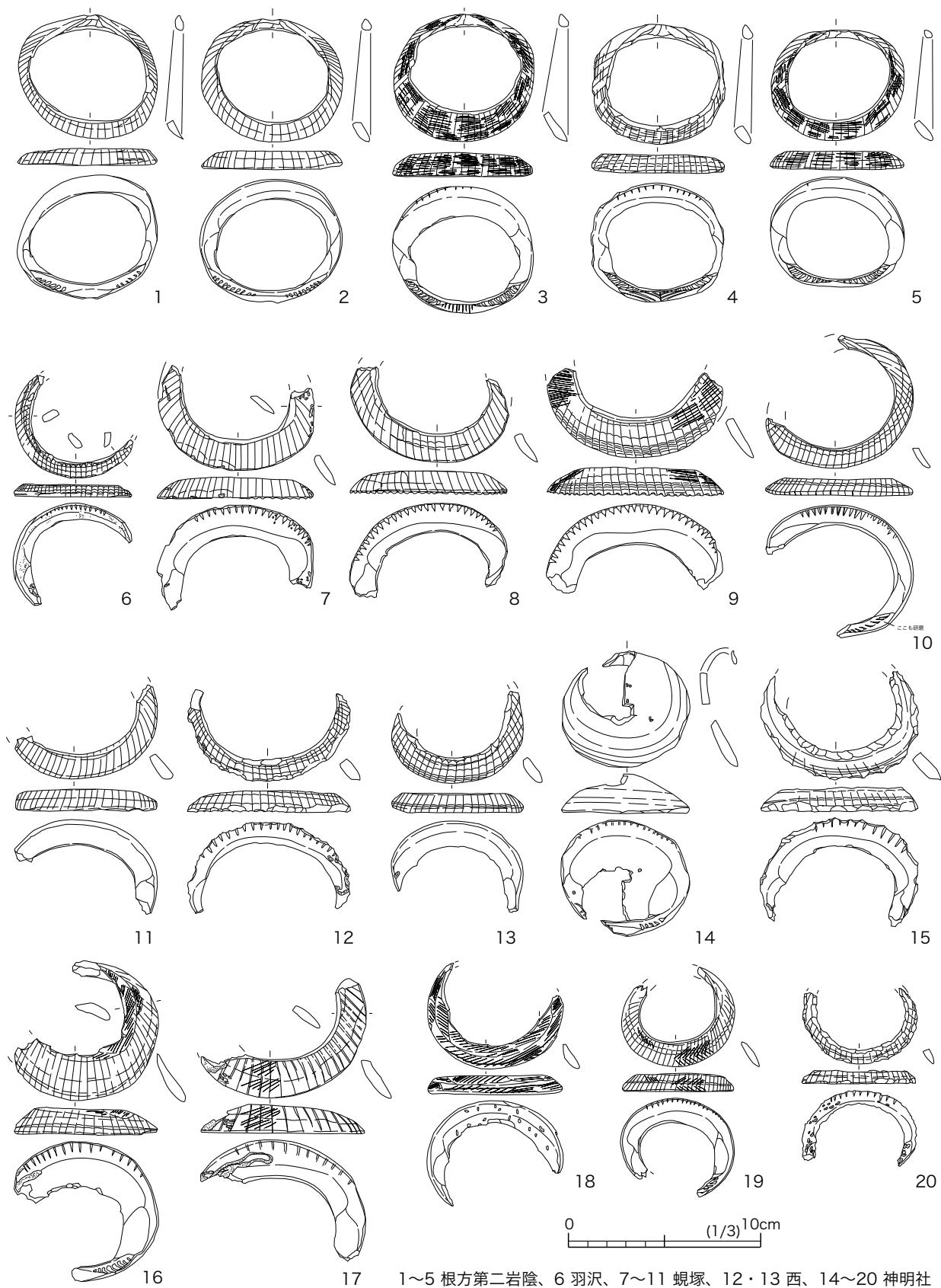
**II期前半** 貝輪群(II)を示すのは蜆塚貝塚・西貝塚などの例である。ここでは内縁敲打の資料と、そのうち表面および内法面を研磨している資料が主体となっている。西例では、1点内縁端を研磨している例が存在しているが、貝素材の殻頂部付近を中心に行われているもので、内縁端全体に及ぶものではない。また両遺跡とともに、外縁部敲打調整を施している可能性がある資料も若干数存在する(12など)。一方、貝輪群(III)を示すのは根方第二岩陰・築地貝塚・八王子貝塚例などである。根方第二岩陰例では内縁敲打のうち表面と内法面を研磨したもの(1・2・5)と表面・内縁端を研磨した例(3・4)が存在する(註8)。この内縁端研磨例も貝素材の殻頂部付近を中心に行われているもので、内縁端全体に及ぶものではない(3など)。図3の3・4では内法面に対して強い研磨を施しておらず、この状態であっても使用されたことを示す好例といえよう。築地例は表面・内縁・外縁に研磨が施されたもので、内縁は研磨の前に敲打調整が行われた可能性が考えられるものである(23)。八王子例は表面と内法面に研磨が施された資料のみであり、これも内縁は研磨の前に敲打が施されたものと考えられる(29~32)。

**II期後半** 貝輪群(I)を示すのに吉胡貝塚・伊川津貝塚(84年調査)などの例がある。ともに内縁加工を初回敲打で終了しているものと、複数回敲打で終了しているものとがある。研磨が施してあるものでは、吉胡例では表面・内法面の研磨(58・59)、表面・内法面・内縁端の研磨が多く見られ、一方、伊川津84例では表面の研磨(63)、表面・内法面・外縁(61・62・

64)の研磨が多く見られる。吉胡例では内縁および外縁に敲打調整を施した状態で終了しているものもいくつか報告されている(田邊2002、および56)。貝輪群(II)を示すのに枯木宮貝塚例がある。ここでは内縁部に対して初回の敲打で終了しているものなく、また内縁敲打で終了している資料も少ない。研磨が施されているものでは表面の研磨、表面・内法面の研磨、表面・内法面・外縁(33・35)の研磨がそれぞれある一定量存在する。貝輪群(III)を示すのに雷貝塚・本刈谷貝塚例などがある。本刈谷例に関して詳細に述べると、すべてに研磨が見られ、表面・内法面の研磨(24)もしくは表面・内法面・外縁の研磨(25・26)に集約されている。

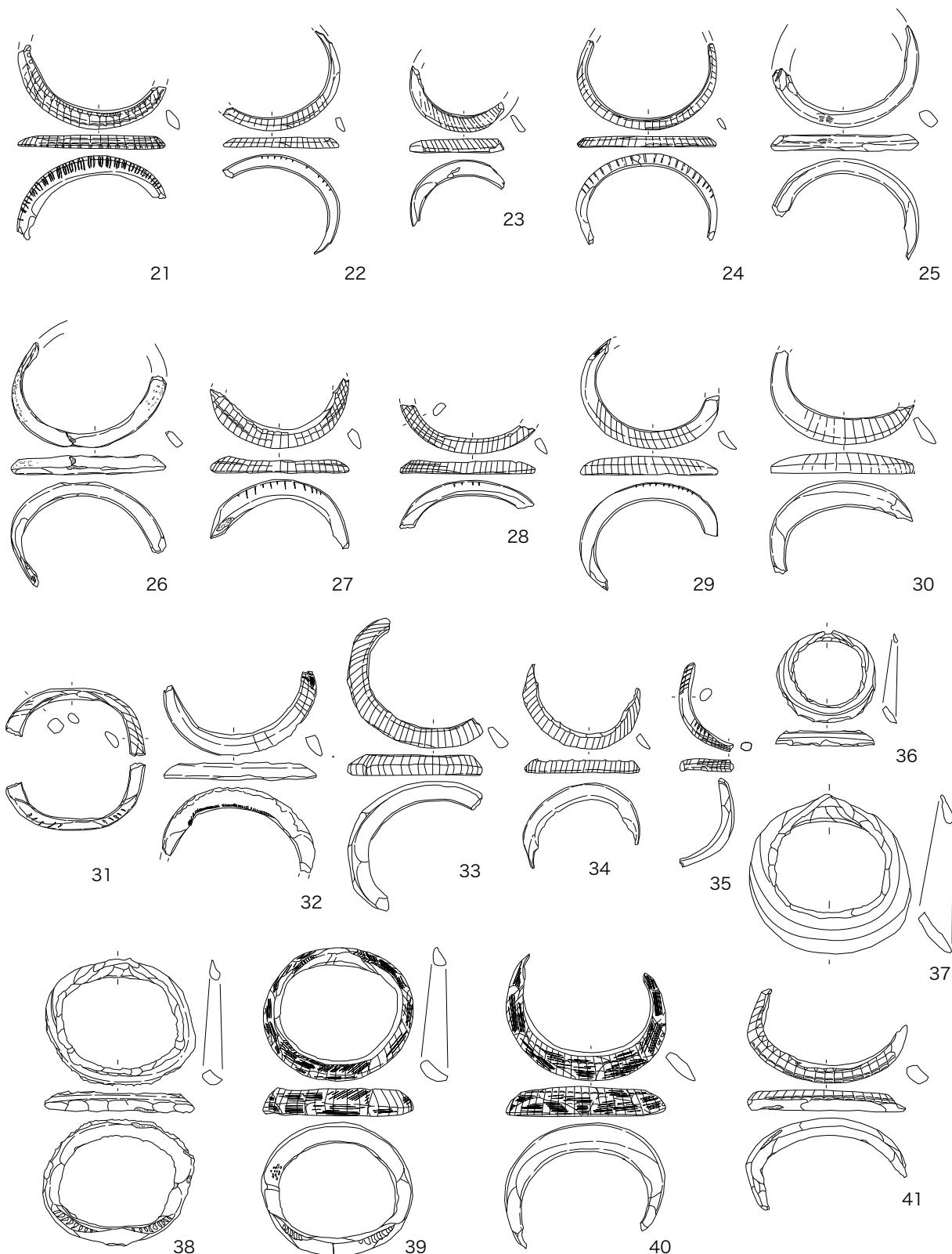
**III期** 貝輪群(I)を示す遺跡が多く出現する。平井稻荷山貝塚・五貫森貝塚・水神第二貝塚・大西貝塚・伊川津貝塚(92年調査分)・大築海貝塚・阿津里貝塚例がある。平井稻荷山例・五貫森例・水神第二例・伊川津92例では内縁のみならず外縁に対して敲打調整を施している資料がある一定量存在しており(36・38・41・42・43・50・68など)、その上で内縁は研磨を施しながらも外縁には顕著な研磨を施していない資料もこれらの貝輪群では存在する。また、伊川津92例では内縁端の研磨が著しく内法面が稜線状になるものも若干数存在する(70)。大築海例は内縁敲打調整のみの資料および、内縁・外縁敲打のうち外縁に研磨を施している例が存在する(75)。また、内縁端の研磨が著しく、内法面が稜線状になるものが存在する(79)。貝輪群(III)を示す遺跡では羽沢貝塚・古沢町遺跡・新御堂貝塚などがある。羽沢例のうち実見しえた資料は、内縁敲打調整の上で、表面・内法面・内縁端・外縁を研磨したものである(6)。新御堂例は内縁敲打のうち、表面の研磨(27)、表面・内法面の研磨(28)が見られる。

また、II期からIII期の複数期にわたる資料が共存する可能性の高い貝輪群には、神明社貝塚と川地貝塚の貝輪群がある。ともに貝輪群(I)を示す遺跡である。神明社例では内縁に対して初回の敲打で終了している例が多く見られ(14)、研磨調整に関しては、内法面に対して施しているものも存在する(17)一方で、内縁端への研磨が著しく内法面が稜線状になるものが



1~5 根方第二岩陰、6 羽沢、7~11 蜷塚、12・13 西、14~20 神明社

図3 東海地域のベンケイガイ製貝輪 1



21・22 神明社、23 築地、24~26 本刈谷、27・28 新御堂、  
29~32 八王子、33~35 枯木宮、36~41 平井稻荷山



図4 東海地域のベンケイガイ製貝輪2

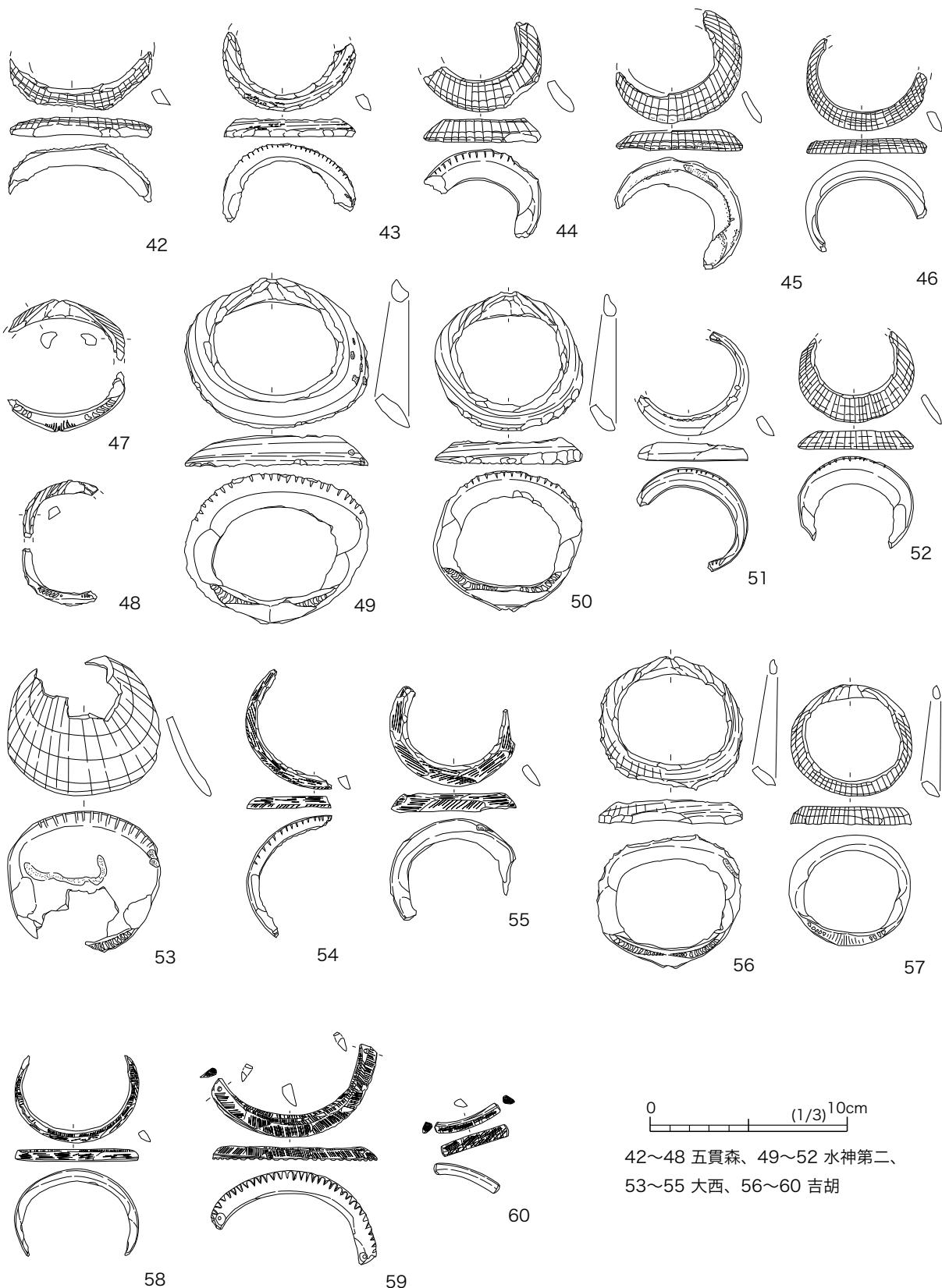


図5 東海地域のベンケイガイ製貝輪3

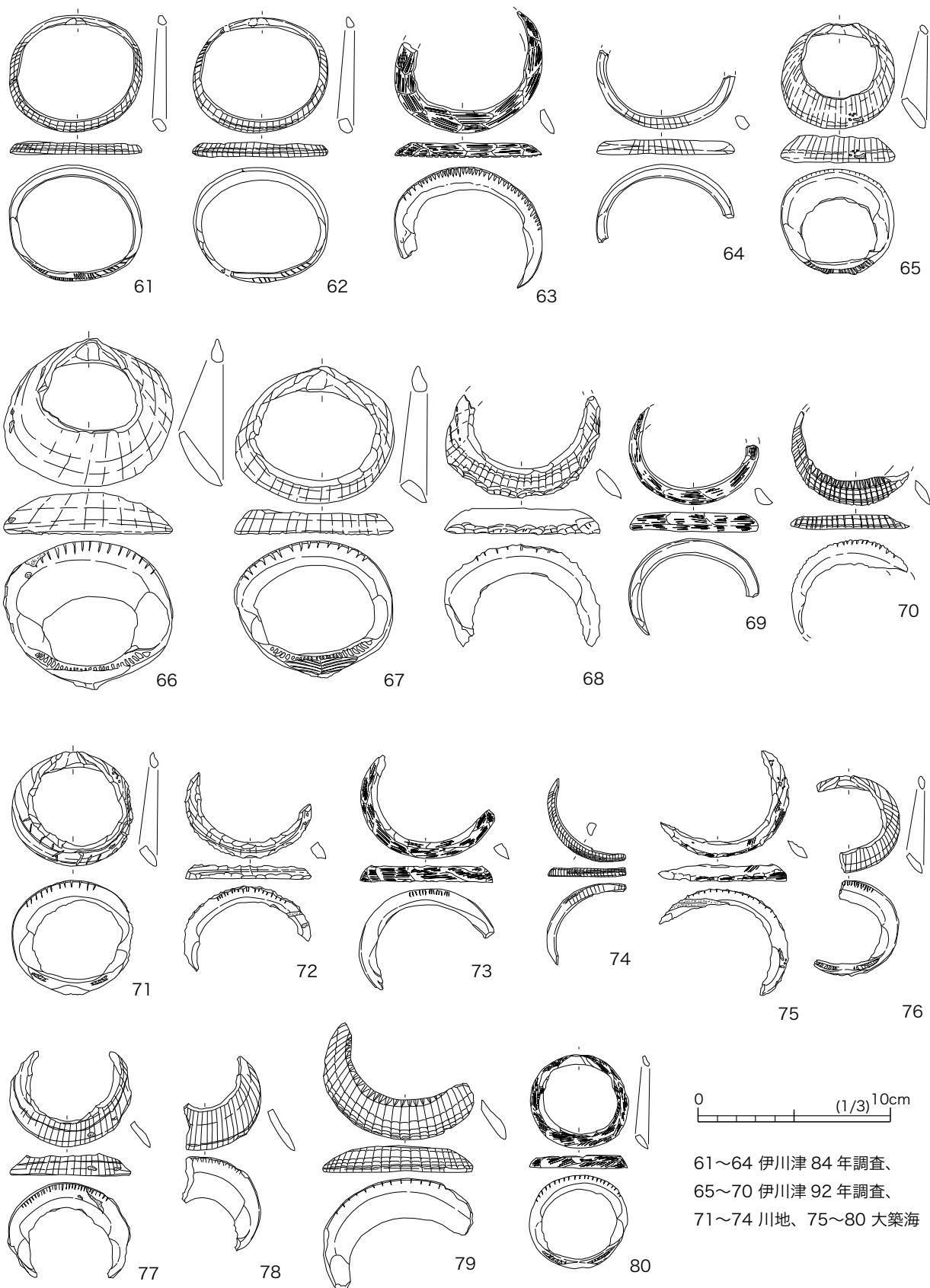
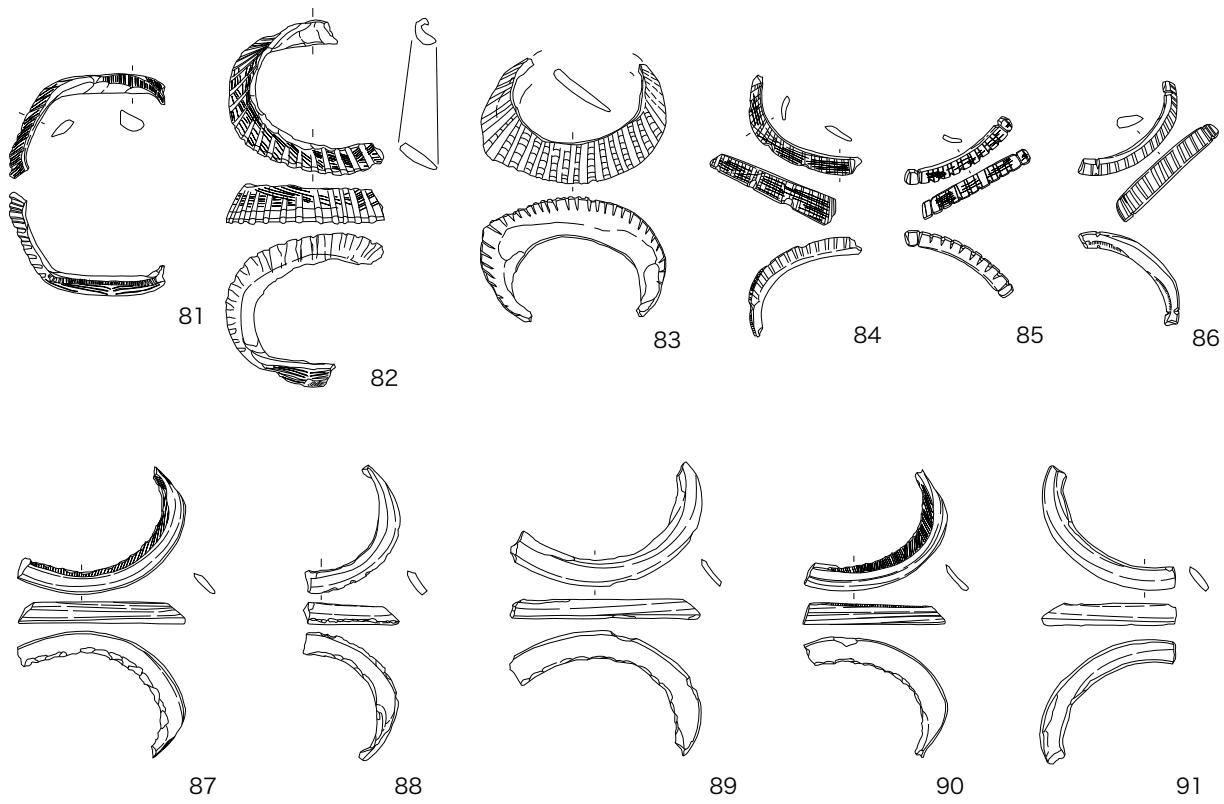


図6 東海地域のベンケイガイ製貝輪4



81~86 フネガイ科、87~91 チョウセンハマグリ？

81・82・87・88 神明社、83 天子神社、84・89~91 枯木宮、85・86 吉胡

0 (1/3) 10cm

図7 東海地域のフネガイ科およびチョウセンハマグリ製？貝輪

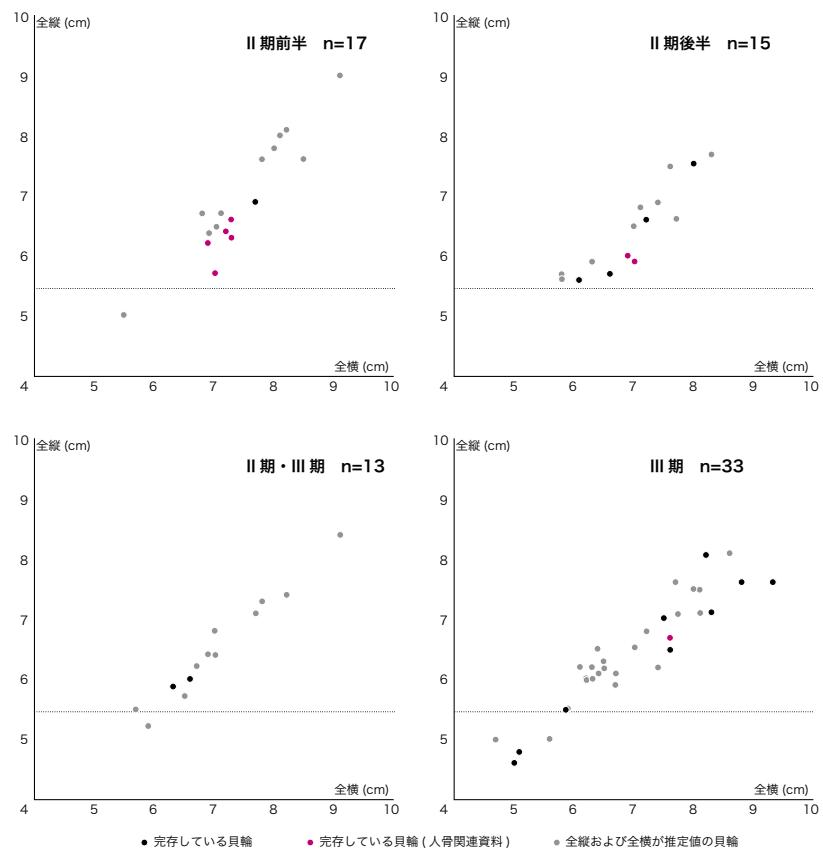


図8 貝輪計測散布図1 (全縦・全幅)

多く存在する(16・18・19)。また、内縁・外縁に敲打調整を施しているものも一定量見られる(15・20)。川地例では内縁敲打調整のもの(71)が多く存在するなか、内縁・内法面研磨(73)、内縁・内法面・内縁端・外縁研磨の例(74)も存在する。また、内縁・外縁敲打調整の事例(72)も存在する。

以上のことから、各時期および遺跡ごとで加工の特徴が窺えられる。特に注目すべき点は、「内法面と内縁端との関係」、および「外縁の処理」についてである。「内法面と内縁端との関係」については、内縁端への研磨が行われているものの表面研磨の一部としての志向が強く内法面が一定幅残されている場合と、内縁端への研磨が著しく内法面が稜線状になる場合とが存在する。前者はII期前半・II期後半・III期を通して存在する一方で、後者はII～III期の神明社例にまとまって存在し、III期の大築海例にも存在し、III期の伊川津92例にも若干数見られる。後者はIII期を中心に出現するようであり、かつ渥美半島から三河湾入口・伊勢湾入口という範囲が中心のようである。また、「外縁の処理」について、著しく行われるようになるのはII期後半からIII期にかけてである。特に、III期の貝輪群(I)を示す遺跡で見られる、外縁敲打調整が極めて特徴的である。外縁敲打が行われている例で、明らかにその後外縁に研磨を施している例は大築海例(75)などごくわずかである。このことに関して、外縁に調整を加える場合は敲打が主体であり研磨は行う志向にはなかった可能性と、外縁敲打を行ったものはほぼすべて「入念に」研磨を行ったため、敲打痕が残存していない可能性の二者が考えられる。一方、II期後半で外縁に調整が行われているものに関しては、研磨しか窺えられない資料が主体であり、敲打で終了している資料は少ない。吉胡例ではみられるものの、これはIII期の一部にまで帰属時期が拡大する可能性のある資料群である。II期後半でも外縁敲打調整のうちに研磨を行っている場合も存在したかもしれないが、敲打調整で終了している資料がIII期ほど顕著ではない。

## 2 計測による分類

貝輪の計測には、以下の3種が必要である。

### 計測1(全縦×全横)

### 計測2(内周縦×内周横、あるいは内縁周)

### 計測3(腹縁幅、または全縦に対する腹縁幅比)

以下、各項目について分析・検討を加える。

なお、貝輪は破片および破損した状態で出土する場合がほとんどであり、これが計測による統計的検討の障害となっている場合がある。ここでは、現生の貝殻を用いて貝素材の法量復元を試みる。このことにより「計測1」をかなりの程度補足でき、「計測2」「計測3」に関してもある程度補足できるものと考えられる。

**計測1** 全体的な法量を決定するもので、必要とされた貝素材の大きさを推測するものである(図8)。どの時期もおおむね全縦が5.5cm以上8ないし9cm未満が多い。II期では築地例(23)、II期～III期の神明社例(19・20)、III期の稻荷山貝塚例(36)・五貫森例(48)・大築海例(80)でそれ以下の「小型」の例も存在する。時期別の傾向では特に分布の中心がみられない。しかし、遺跡ごとの貝輪群では、II期前半では根方第二岩陰例(1～5)・八王子例(29～32)、II期後半では本刈谷例(24～26)、III期では新御堂例(27・28)などベンケイガイ製貝輪群(III)を示す貝輪群では、法量がほぼ近いもののみでまとまっている場合もある。一方、貝輪群(I)を示す遺跡では、各遺跡での貝輪群全体で法量により幅があることが指摘できる。

**計測2** 内縁の大きさを示すものである。腕輪としての使用の可否を推測するために先学の研究でも特に注意が払われており、この値の算出にはいくつかの方法が提示されている。今回は、伊川津貝塚の報告で提示された安川氏の計測方法を参考に「内縁周」を算出した(註9)。図9は今回調査した資料の中で「全縦」「全横」「内縁周」のすべてが算出可能なものについて提示したものである。多く資料は内縁周10cm以上で、内縁周に対する全縦には資料間に差がみられるようである。しかしある内縁周値を保持するために最低とされる法量として、図9中の破線が想定される。なお、埋葬人骨に着装および関係した状態で出土したものは、全縦に

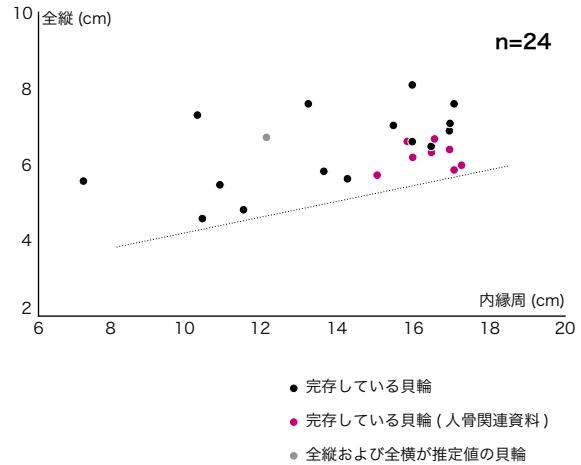


図9 貝輪計測散布図

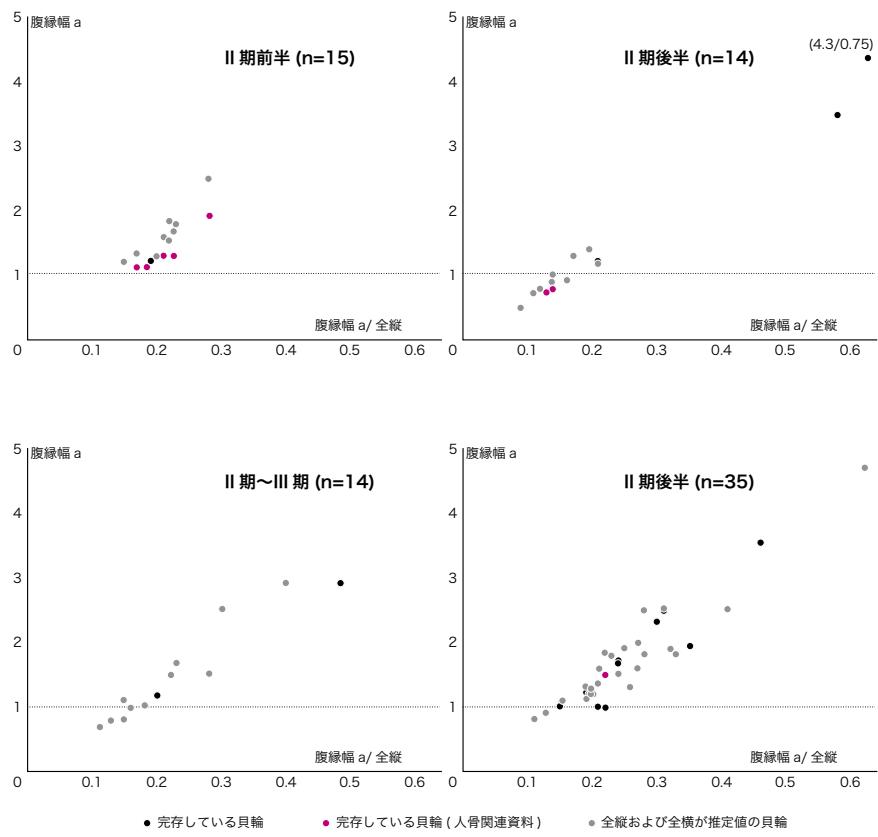


図10 貝輪計測散布図3(腹縁幅 a)

関わらず内縁周 15cm 以上を示している。

**計測3** 内縁の大きさに関するものの、外縁の処理を含めて貝輪の形態的特徴を示すものもある。ここでは図1で提示した「腹縁幅a」および「腹縁幅b」の両者について、全縁との関係を示した(図10・11)。「腹縁幅a」については1cm未満、「腹縁幅b」については0.8cm未満の資料はII期前半には見られないことが大きな特徴である。

### 3 形状による分類

ここでは「腹縁側断面」について特に検討する。断面形状の特徴としては、敲打調整時に形成された内法面の幅が保持されているもの、内法面幅が保持されている上に外縁部に調整が加えられているもの、内法面が稜線状になるものの三種類に分類できる。また、腹縁幅と腹縁の厚さとの関係について見る上で、「腹縁幅b」と「全厚」との関係が参考になる(註10)。「腹縁幅b」より「全厚」が大きいもので外縁部調整が加えられているものでは、断面が四角形状を呈するものと断面が台形状を呈するものがある。かつ、「内法面が稜線状」を形成し「腹縁幅<全厚」を示す資料は現在のところ見つかっていない。以上のことから、「腹縁側断面」をA～Fの6種類に分類できる(図12)。

「腹縁側断面A・B」を示す貝輪は、II期・III期を通じて存在するようである。その中でも「腹縁側断面A」では、II期前半に腹縁幅がより保持される資料が多いことが指摘でき、これは上述した「計測3」の結果に関連する。「腹縁側断面B」はII期後半からIII期にかけてより多く存在する。「腹縁側断面C・D」は外縁研磨を行ったものである。「腹縁側断面C」は蜆塚貝塚でも確認でき(11など)、II期・III期を通じて存在する。「腹縁側断面D」は外縁研磨調整のため裏面側にまで稜線が形成されるものである。研磨調整のみもしくは敲打調整の痕跡が消去されるほど研磨調整を行ったもの(25・26・35・61・62・64など)が主体で、II期後半に多く見られる。また敲打調整のみでこの形状を呈するものも若干存在する(38)。「腹縁側断面E」は外縁敲打調整のみの資料である。どの資料も「腹縁幅b」と「全厚」が同じもし

くは「全厚」が大きい資料のみで、「腹縁幅b」が顕著に大きい例は現在のところ存在しない。一方、「腹縁側断面F」は内縁端研磨が著しく、内法面が稜線状になるものである。この断面形状を示す資料で「腹縁幅b」より「全厚」が大きい資料は見られないことは上述した通りである。東海地域では、「腹縁側断面E・F」を示す貝輪で、人骨着装例は現在までのところ知られていない。また、出土もIII期を主体とする遺跡からが中心であることから、神明社例・川地例の中で「腹縁側断面E・F」を示す貝輪は、この時期のもの可能性がある。

### 総合的考察

以上の分析から、時期ごとに東海地域のベンケイガイ製貝輪について若干の考察を行う(図13)。

**II期前半**(後期中葉～後期末) 内縁を敲打、もしくは敲打のち研磨を施して終了している資料が主体を占める。腹縁幅が太目のものが多く、「腹縁幅a」で1cm以上、「腹縁幅b」で0.8cm以上を保持する。「腹縁側断面」AおよびCを呈するものが目立つ。

**II期後半**(晩期初頭～前葉) 腹縁幅が太目のものに加え、「腹縁幅a」で1cm未満、「腹縁幅b」で0.8cm未満の細目のものが加わる。このことに関連して「腹縁側断面A・B・C・D」を示す資料が出現する。その中でも「腹縁側断面D」は外縁部への調整が顕著なもので、明確な敲打調整を示す例がなく、研磨調整を主体として形成されたものと考えられる。「腹縁側断面D」は「腹縁幅b」を「全厚」より小さくすることで、長方形状もしくは隅丸方形状に加工する意図が見られる。他貝種の貝輪の中で腹縁部を加工しているものとして、チョウセンハマグリ製の貝輪がある(87～91)。枯木宮貝塚では、この貝種の貝輪が13点と、ベンケイガイ製に匹敵する程度にとまとまって出土しており、当貝塚では両者の相互関係を考慮することができるであろう(註11)。

**III期**(晩期中葉～晩期末) ベンケイガイ製が貝輪貝種の主体となる。この時期は、出土遺跡数が顕著に増加するが、多くは貝輪群(I)を示

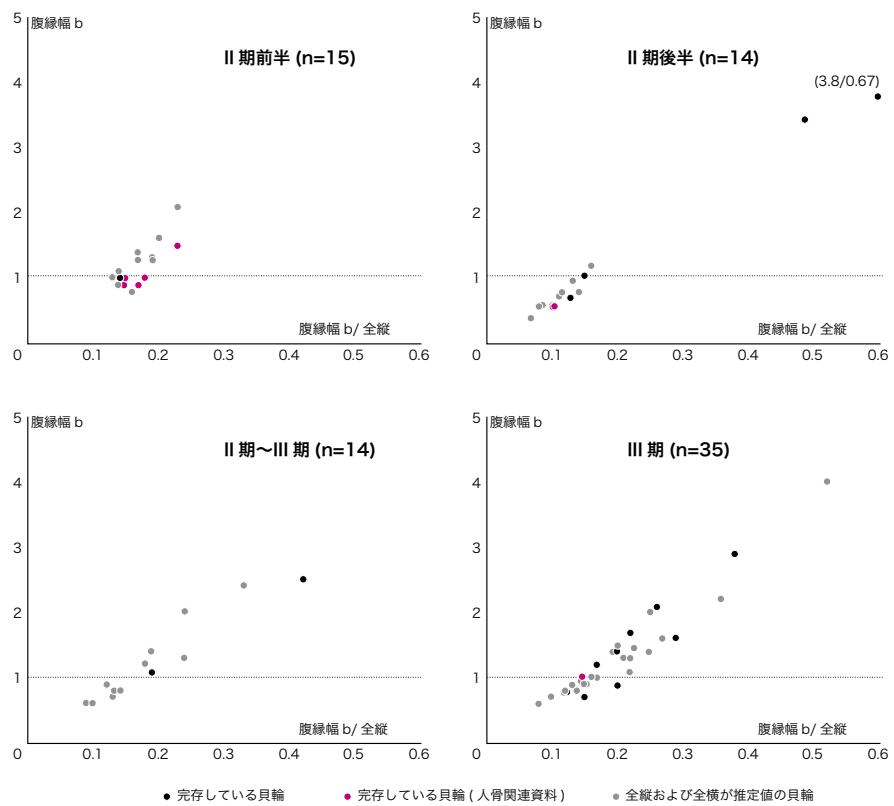


図 11 貝輪計測散布図 3 (腹縁幅 b)

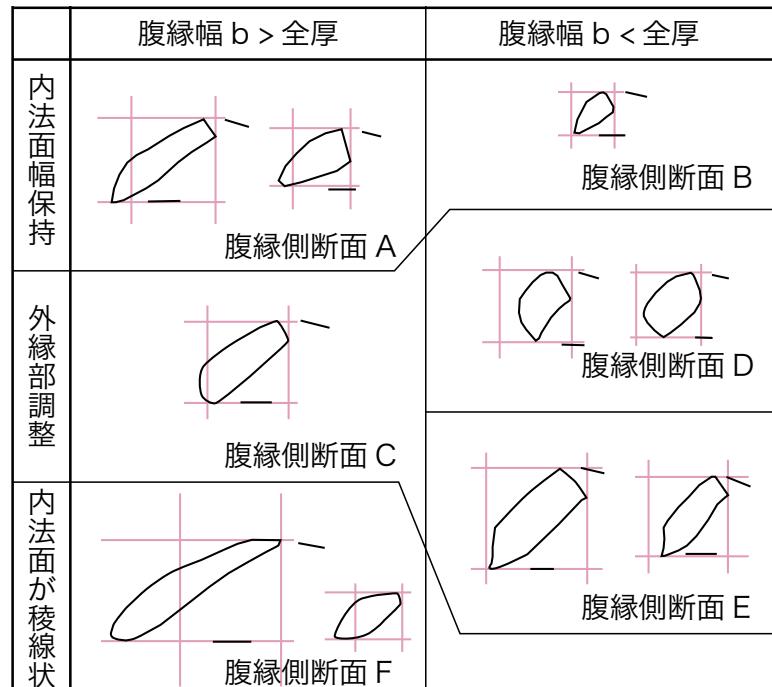


図 12 腹縁側断面形態分類図

す。これまでの貝素材よりも小型のものの使用も顕著になり、全縦 5.5cm 以下のものも出現する。II 期後半同様に腹縁幅太目のものと細目のものが共存し、「腹縁側断面」では A・B・C・D に加え、新たに E・F が見られるようになる。外縁部の調整では、敲打調整が顕著化する傾向にある。これら的一群は「腹縁側断面 E」を示す。「腹縁側断面 E」を示す資料は、「腹縁幅 b」が「全厚」より小さく、いわば相対数値的に腹縁幅が広い例は存在しない。一方、内縁端研磨を著しく行ない、内法面が稜線化する資料が出現する。これらは「腹縁側断面 F」を示す。この資料は「腹縁幅 b」が「全厚」より大きく、「腹縁側断面 E」とは対照的に相対数値的に腹縁幅が小さい例は存在しない。「腹縁側断面 E・F」を示す資料は、貝素材の大きさに関わらず見られることから、これらは内縁周の大きさという機能・用途的な要因によるものではなく、いわば形態的な志向によるものと推定することができる。特に「腹縁側断面 E」は「腹縁側断面 B」と同様の効果を敲打調整によって行ったものとも推測できる。

各時期とも、貝輪群 (I)(II) を示す資料では、さまざまな加工の状態や程度・法量・形態を包括している一方で、貝輪群 (III) を示す資料では、これらが「ある一定の幅」に収斂されていく傾向がある。まず、貝輪群 (I)(II) に関して言及すると、II 期前半から II 期後半そして III 期となるにつれて、遺跡ごとの各貝輪群内では以前まであった志向に加えて新しい志向が加わり、結果として複数の志向が共存する様相となる。特に、II 期後半・III 期では、志向別の数量的差は存在するものの、ほぼすべてが同一の志向に基づきいわば「一方向」に製作されていた強い意図は窺えられない。また貝輪群 (III) については、遺跡に持ち込まれた状態が問題となる。II 期前半・II 期後半では、貝輪群 (III) を示す資料の類例が貝輪群 (I)(II) を示す資料の中にもみることができ、貝輪群 (III) は搬入された状態のまま使用された可能性がある。一方、III 期の場合は、特に外縁敲打調整の見られる資料の存在について、貝輪群 (I) と貝輪群 (III) とでは、明らかに差が生じている。貝輪群 (III) の中で外縁研磨調整の施されているものの中に

は、その前に敲打調整を施されているものが含まれていることは想定されるものの、貝輪群 (I) の資料を含めても上述したように現在その明確な事例はごくわずかである。外縁調整としての敲打調整は、すべてが研磨調整を行うための前段階とは捉えず、また反対に外縁敲打調整のみの資料も単純に「未製品」とは考えられない（註 12）。貝輪群 (I) に対し貝輪群 (III) の資料が少ないものの、現段階では外縁敲打調整の見られる資料は貝輪群 (III) を示す遺跡にはもたらされていないといえよう。

図 13 は以上のことまとめたものである。II 期後半と III 期では製作の志向に地域的差が生じている。II 期後半の「腹縁側断面 D」に関しては、貝輪群 (I) を示す伊川津貝塚、貝輪群 (II) を示す枯木宮貝塚、貝輪群 (III) を示す本刈谷貝塚に見られ、特に枯木宮例と本刈谷例とはより近い関係にあったことが想定される。また、III 期では外縁敲打調整の例が三河湾奥部—渥美半島—伊勢湾・三河湾口—志摩半島にわたって広がっている一方で、内法面稜線化の例が渥美半島先端から伊勢湾・三河湾口に限定して分布している。これらはすべて貝輪群 (I) を示す遺跡であるのが大きな特徴である。

貝輪は機能・用途としては腕輪を主体としていたと考えられる遺物である。今回の分析を通じて、同一の機能・用途のものも、その時期により素材貝の法量をはじめ、製作される志向および「製作+使用遺跡」の様相など、それが製作・使用される社会的背景が同一ではない可能性を指摘した。特に、III 期の貝輪群 (I) を示す遺跡群の増加は示唆的であり、この歴史的意義の解明は今後の課題である。

#### 謝辞

この小論をまとめにあたり、以下の方および諸機関から、ご教示およびご配慮を賜った。文末ながら厚くお礼申し上げる次第である。

伊藤秀紀・伊藤正人・岩田 崇・鵜飼堅証・坂野俊哉・増山禎之・松井直樹・山崎 健・愛知県埋蔵文化財センターの諸氏

愛知県教育委員会・渥美町郷土資料館・磐田市埋蔵文化財センター・刈谷市郷土資料館・天理大学天理参考館・豊橋市美術博物館・南濃町教育委

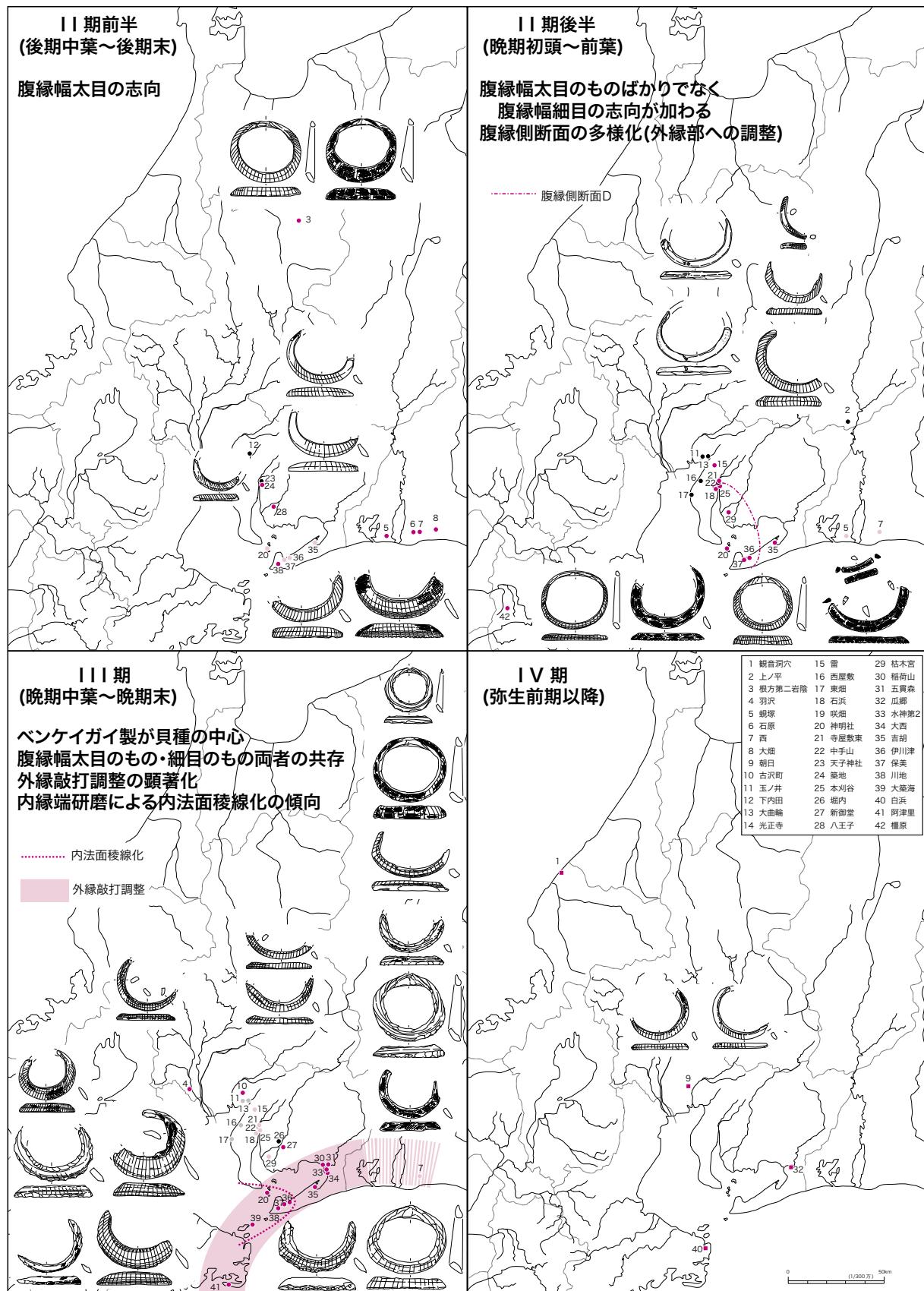


図 13 ベンケイガイ製貝輪の時期別変遷図

註

- 1) 筆者は先に東海地域の貝輪についてその概要と研究の展望についてまとめた(川添2005b)。これを「前稿」と称す。以下同じ。
- 2) 阿津里貝塚および川地貝塚出土貝輪群の所属時期について、若干の所見を示す。阿津里貝塚に関して、この貝塚調査に先鞭をつけられ、貝輪を発見された鈴木敏雄氏は、「弥生期」(弥生時代後期を示しているか)以降の遺物が多いとしながらも、縄文土器・石鏃・貝輪などの出土から「三重県下唯一の縄文貝塚」とされ、その歴史的意義を強調されている(鈴木1951)。縄文土器は前期・中期・後期のものがあり、これらの時期期から遺跡の営みが始まったと考えられているようである。その一方、貝層の北端を中心に調査された立教大学博物館学講座の調査所見ではあくまで貝層は古式土器の時期が主体であり、「砂丘上に立地するため、より古い遺物の混入することが、他の遺跡の場合より多かったであろう」とされている(立教大学博物館学講座1966)。阿津里貝塚全体を覆っている貝層の時期は弥生時代後期以降が主体でありつつ、層の状態は不良ながらもその下層には地点的に縄文時代の貝層あるいは包含層が存在していた可能性は十分にあろう。鈴木氏は立教大学調査時より、良好な状態でかつ広範囲に渡り調査したようであるにも関わらず、縄文時代の層を明確に特定しえなかつたようであるが、これは遺跡の状態に起因している可能性がある。しかし筆者が注目するのは、貝輪の出土と同時にサカイト製石鏃および剥片の出土が報告されている点である。石鏃・剥片の出土は貝輪の出土がなかった立教大学調査時には皆無である。かつ、この石鏃には『三重考古図録』には5点掲載されており、そのうち2点は有茎鏃である。三重県下で有茎鏃が顕著になるのは晩期中葉以降のようであることから(川添2005a)、土器の出土は知られていないものの当時期以降、かつ石器使用が終了する弥生時代中期末までの活動が営まれていた可能性が考えられる。ここではこの状況を重視し、阿津里貝塚の貝輪群をIII期に考える次第である。また、川地貝塚資料についても、1993年の調査で縄文時代晩期後葉～櫻王式期までの遺物も若干出土している(原田1995)。このことから、貝輪群の一部はこの時期のものである可能性を指摘しておく。
- 3) II期後半を主体とする遺跡の多くは稻荷山式までは続く遺跡が多く、III期を主体とする遺跡の一部には稻荷山式から始まる遺跡がある。したがって、一遺跡の貝輪群内で稻荷山式を境とした厳密な区別は難しい場合が多いのも事実である。本稿では、便宜的に稻荷山式の時期のものを含むものもII期後半を主体とする資料群を一括してII期後半に含んでいる。なお、吉胡貝塚資料は、ここではII期後半で一括しているが、今後突帯文・条痕紋期まで含めたIII期の資料が分類できるかもしれない。
- 4) 前稿同様に、「フネガイ科」はアカガイ・サトウガイ・サルボウを含んでいる。
- 5) ( )内の算用数字は図3～7の遺物番号を示す。
- 6) 「前稿」では「g」の項目は設けなかった。東海地域の資料では、裏面研磨の事例は明確ではないものの、柏子所貝塚例など他地域では若干数存在する。東海地域の資料でも今後このような資料が出土することを考え、一項目設けることとした。
- 7) ここで「製作遺跡」・「使用遺跡」と称しているのは、最終結果としてその状態が窺えられる遺跡という意味である。現位置で「製作」・「使用」しているということに限定している訳ではないことを付記しておく。
- 8) 内法面研磨には手持ち砥石が必要と考えられる。表面・内縁端研磨には手持ち砥石・置き砥石の両者が可能と考えられるが、特に、内法面が稜線状になる程度に内縁端を研磨する場合など、置き砥石が有効である場合もある。つまり、内法面とそれ以外の部分の研磨とでは加工時の身体動作が異なる可能性がある。
- 9) 人骨着装資料などの比較により、貝輪が実際に「腕輪」としての用途が想定される内縁の大きさを提示するには、「内周縦」と「内周横」との散布図による検討で必要十分である(渡辺1974など)。しかし、ここでは「計測3」との比較検討を行う目的から、「内周縦」と「内周横」の値から「内縁周」を算出し、それと貝輪法量との関係を提示する。
- 10) ほぼすべての資料で、「全厚」が腹縁部で計測されるため、このような表現をした。
- 11) 「腹縁側断面D」を行う根本的意図は、貝輪の中のみに求められない可能性もある。貝素材以外の腕輪とされているものについても合わせて検討が必要であろう。
- 12) 外縁敲打調整について若干補足をする。田邊氏は吉胡貝塚(山内清男資料)の整理を通じて、次のように述べられている。「吉胡貝塚では、仕上がりの大きさが内径6cm前後に統一されるなど、貝輪の規格が厳密に行われていたようである。貝が小型の場合は貝殻内側に見られる外套線より外側で、大型の場合は内側で輪を作られる。このため大型の貝は(途中省略)貝殻周縁が打ち欠かれる」(田邊2002)。確かに、現在のところ吉胡貝塚例は「仕上がりの大きさが内径6cm前後」が多い様であるが、その機能・用途的色彩の強い「内径6cm前後」と腹縁側断面など形態的特徴に強く反映する外縁敲打調整とは同一の事情での説明はできない。田邊氏も述べられているようにこの吉胡貝塚例は「晩期の古・中段階(大宮式・稻荷山式に相当)のものが多い」とされており、本論でいうところのII期後半からIII期の初めにわたって見られる資料と位置づけられる。時期幅を含めて、これらの資料群を同一の工程上に配置して製作工程を説明するには、さらに分析・検討が必要であろう。

参考文献

- 上野修一 1990 「縄文時代の腕飾り」『月刊 文化財』326、35～39頁、文化庁。
- 大和久震平ほか 1966 『柏子所貝塚—第2次・第3次発掘調査報告書—』秋田県教育委員会・能代市教育委員会。
- 忍沢成視 2000 「縄文時代における貝製装身具の実際」『貝塚博物館紀要』27、1～24頁、千葉県立加曽利貝塚博物館。
- 忍沢成視 2001 「縄文時代における主要貝輪素材ベンケイガイの研究—千葉県成田市荒海貝塚産資料と千葉県天津小湊町浜荻海岸採集の現生打ち上げ貝の検討から—」『史館』31、17～48頁、史館同人。
- 忍沢成視 2005 「貝輪素材として選択された貝輪の流行の背景—フネガイ科の貝輪素材の分析を中心として—」『動物考古学』22、37～63頁、動物考古学研究会。
- 片岡由美 1983 「貝輪」『縄文文化の研究』9、231～241頁、東京 雄山閣出版。
- 金子浩昌・忍沢成視 1986 『骨角器の研究 縄文篇 I・II』東京 慶友社。



- 川口徳治朗 1989『縄文時代貝塚出土の貝製品に関する用途的研究』昭和 63 年度科学研究費補助金(一般研究 C)研究成果報告書。
- 川添和暁 2005a「東海地域における縄文時代後晩期の石鏃について」『関西縄文論集 2』1~12 頁、関西縄文文化研究会。
- 川添和暁 2005b「東海地域における貝輪について—その製作・消費・廃棄の流れ—」『考古学フォーラム』18、60~77 頁、考古学フォーラム編集部。
- 木村幾多郎 1980「貝輪」『新延貝塚』87~91 頁、鞍手町教育委員会。
- 清野謙次ほか 1920『備中国浅口郡大島村津雲貝塚発掘報告』京都帝国大学文学部考古学研究報告 5。
- 九州縄文研究会 2005『九州の縄文時代装身具』九州縄文研究会 沖縄大会実行委員会。
- 酒詰仲男 1941「貝輪」『人類学雑誌』56-5、1~24 頁、日本人類学会。
- 新東晃一 1991「南九州の縄文後期の貝輪—特に川上貝塚出土の貝輪製作工程について—」『南九州縄文通信』5、50~55 頁。
- 田邊由美子 2002「吉胡貝塚出土の骨角貝製品」『山内清男考古資料 13』46~53 頁、奈良文化財研究所。
- 春成秀爾 1980「縄文晚期の埋葬原理」『小田原考古学研究会報』9、44~60 頁、小田原考古学研究会。
- 樋口清之 1952「腕輪考」『上代文化』23、9~19 頁、国学院大学考古学会。
- 福田友之 1995「北日本におけるベンケイガイ交易—津軽海峡を渡った貝輪—」『北海道考古学』31、125~146 頁、北海道考古学会。
- 堀越正行 1985「関東地方における貝輪生産とその意義」『古代』80、311~322 頁、早稲田大学考古学会。
- 堀越正行 1990「縄文時代の貝製腕輪」『月刊 文化財』326、40~45 頁、文化庁。
- 堀越正行・田多井用章 1996「東京大学蔵の船橋市古作貝塚出土遺物」『千葉県史研究』4、75~90 頁、千葉県。
- 永井昌文 1972『山鹿貝塚』山鹿貝塚調査団。
- 松永幸男 1995「福岡県遠賀郡芦屋町山鹿貝塚採集貝製腕輪の紹介」『研究紀要』2、31~46 頁、北九州市立考古博物館。
- 安川英二 1988「貝製品」『伊川津遺跡』215~248 頁、渥美町教育委員会。
- 八幡一郎 1928「最近発見された貝輪入蓋附土器」『人類学雑誌』43-8、357~366 頁、東京人類学会。
- 渡辺 誠 1972「縄文時代における貝製腕輪」『古代文化』21-1、1~8 頁、古代學協会。
- 渡辺 誠 1973「装身具の変遷」『縄文土器と貝塚』古代史発掘 2、147~151 頁、東京 講談社。
- 渡辺 誠 1974「赤貝の腕輪」『えとのす』1、89~93 頁、東京 新日本図書株式会社。

#### 報告書など

- 愛知県教育委員会 1982『朝日遺跡 II』。
- 麻生 優 1961『西貝塚』磐田市教育委員会。
- 市原寿文 1967「遠江石原貝塚の研究—縄文後期における地域性の問題をめぐって—」『人文論集』18、25~50 頁、静岡。
- 市原寿文編 1981『袋井市大畑遺跡—1951・1977・1978・1980 年度の発掘調査—』袋井市教育委員会。
- 磯部幸男・井関弘太郎・杉崎 章・久永春男 1960『咲畠貝塚』愛知県知多郡師崎町立師崎中学校。
- 伊藤正人・川合 剛 1993『名古屋の縄文時代 資料集』名古屋市見晴台考古資料館。
- 岩瀬彰利編 1995『大西貝塚』豊橋市教育委員会。
- 岩瀬彰利編 1996『大西貝塚 (II)』豊橋市教育委員会。
- 岩瀬彰利編 1998『水神貝塚 (第 2 貝塚)』豊橋市教育委員会。
- 大參義一・加藤安信・山田 猛・川合 剛ほか 1989『刈谷市史 第五巻 資料 自然・考古』刈谷市。
- 大山 柏 1923「愛知県渥美郡福江町保美平城貝塚発掘概報」『人類学雑誌』38-1、1~25 頁、人類学会。
- 小川栄一 1933「第七 庭田及羽沢貝塚」『岐阜県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』2、36~47 頁、岐阜県。
- 小野田勝一 1991『渥美町史 考古・民俗編』渥美町。
- 小野田勝一・安井俊則ほか 1993『川地遺跡』渥美町教育委員会。
- 小野田勝一・春成秀爾・西本豊弘 1988『伊川津遺跡』渥美町教育委員会。
- 小野田勝一・芳賀 陽・安井俊則 1995『伊川津遺跡』渥美町教育委員会。
- 清野謙次 1969『日本貝塚の研究』東京 岩波書店。
- 紅村 弘 1963『東海の先史遺跡 総括編』名古屋 名古屋鉄道。
- 小金井良精 1923「日本石器時代人の埋葬状態」『人類学雑誌』38-1、25~47 頁、人類学会。
- 後藤守一ほか 1957『蜆塚遺跡 その第一次発掘調査』浜松市教育委員会。
- 後藤守一ほか 1958『蜆塚遺跡 その第二次発掘調査』浜松市教育委員会。
- 後藤守一ほか 1960『蜆塚遺跡 その第三次発掘調査』浜松市教育委員会。
- 後藤守一ほか 1961『蜆塚遺跡 その第四次発掘調査』浜松市教育委員会。
- 後藤守一ほか 1962『蜆塚遺跡 総括編』浜松市教育委員会。
- 後藤守一ほか 1963『瓜郷』豊橋市教育委員会。
- 小林知生ほか 1967「5 岐阜県根方岩陰」『日本の洞穴遺跡』175~187 頁、東京 平凡社。
- 小林知生・高平修一・長谷部学・早川正一 1966『保美貝塚』渥美町教育委員会。
- 斎藤弘之 2004「3 堀内貝塚」『新編 安城市史』10 資料編 考古、12~25 頁、安城市。
- 末永雅雄 1961『権原』奈良県教育委員会。
- 杉崎 章ほか,1958『西屋敷貝塚』八幡公民館郷土史編纂室。
- 杉原莊介・外山和夫 1967「豊川下流域における縄文時代晩期の遺跡—稻荷山遺跡・五貫森遺跡・大蚊里遺跡・水神平遺跡の調査—」『考古学集刊』2-3.37~101 頁、東京考古学会。

- 鈴木敏雄 1951『三重県越賀村考古誌考 志摩郡越賀村阿津里貝塚並に附近関係地に於ける遺跡と遺物』楽山文庫蔵。
- 鈴木とよ江 1995『貝ス遺跡・新御堂遺跡』西尾市教育委員会。
- 萩本 勝ほか 1990『白浜遺跡発掘調査報告書』本浦遺跡群調査委員会。
- 早野浩二ほか 2005「朝日遺跡」『年報 平成 16 年度』13 ~ 19 頁。愛知県埋蔵文化財センター。
- 原田 幹編 1995『川地遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 久永春男・杉浦 知 1998『築地貝塚遺物概報』刈谷市教育委員会。
- 久永春男ほか 1972『伊川津貝塚』渥美町教育委員会。
- 廣嶋一良 1986「観音洞穴遺跡」『福井県史 資料編 13 考古一本文編一』147 ~ 149・194 ~ 195 頁、福井県。
- 福岡猛志・楠美代子 2003『新編 東浦町誌 資料編 原始・古代・中世』愛知県知多郡東浦町。
- 藤本健三・野村宗作・渡辺 誠 1995「岐阜県丹生川村根方岩陰遺跡発見の貝輪」『飛騨と考古学』275 ~ 281 頁、飛騨考古学会。
- 文化財保護委員会 1952『吉胡貝塚』
- 中村文哉・出口 剛 1992『平井稻荷山』小坂井町教育委員会。
- 牧富也ほか 1983「枯木宮貝塚」『西尾市史 自然環境 原始古代』802 ~ 901 頁、西尾市史編纂委員会。
- 増山禎之 2003『国指定史跡吉胡貝塚 平成 13・14 年度範囲確認調査の概要報告書』田原市教育委員会。
- 松井直樹 2003『八王子貝塚 IV』西尾市教育委員会。
- 三重県教育委員会 1954『三重考古図録』三重県。
- 宮腰健司 1992『朝日遺跡 III』愛知県埋蔵文化財センター。
- 宮下健司 1988「骨角器・牙器・貝器」『長野県史 考古資料編 全一巻(4) 遺構・遺物』411 ~ 413 頁、長野県。
- 山下勝年編 1989『神明社貝塚』南知多町教育委員会。
- 吉田富夫・和田英雄 1971『名古屋市中区古沢町遺跡発掘調査報告書』名古屋市教育委員会。
- 立教大学博物館学講座 1966「3. 大築海貝塚の発掘調査」『MOUSEION』12、46 ~ 50 頁。
- 渡辺 誠編 2000『羽沢貝塚発掘調査報告書』南濃町教育委員会。